

研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 随伴性に基づくペダゴジカル情報基盤の創成

2. 研究代表者名及び主たる共同研究者名

研究代表者

開 一夫（東京大学大学院 総合文化研究科 教授）

主たる共同研究者

河本 満 （産業技術総合研究所 人間拡張研究センター 主任研究員）

橋田 浩一（東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授）

加茂 登志子（（一社）日本 PCIT 研修センター センター長）（2020 年度まで）

3. 事後評価結果

○評点：

B やや劣っている

○総合評価コメント：

認知科学と情報科学を有機的に結びつけ、詳細かつ厳密な実験室実験からの知見を、現実世界での「学び」場面へと繋ぐためのペダゴジカル情報基盤の構築を目指した。課題の核である「随伴性」に関連して2つの新しい知見を得た。学びのインタラクションについて計測・蓄積・活用の3項目からアプローチしている。

インタラクション活用の観点では、乳児を対象とした社会的認知に関する研究において、乳児でも視線(Eye-Gaze)とその結果に関する随伴的な事象を認知している（視線随伴性）ことを明らかにした。蓄積の観点では、分散型認知実験プラットフォーム(Go-E-MON: GOod Environment for Mankind ONline)を開発し、オンラインで参加可能な認知実験環境と分散 Personal Data Store(PDS)とを連携させた。学習者の単語学習アプリ接触時刻と活動量計（ウェアラブルセンサ）のデータを紐づけた研究により、英単語学習時刻と入眠時刻に関して従来の認知科学的知見を覆す新しい結果を得た。

個々には興味深い成果が出ているが、少数の事例で随伴性の効果について示した段階で、研究課題への掘り下げが不十分であった。全体として、幼児の随伴行動の確認や、その他の学習者の状態計測技術などが有効に組合せられておらず、個別の研究成果にとどまっている。計測・蓄積・活用の連携もエンジニアリングの段階にとどまり、ペダゴジカル情報基盤の科学に至らなかったことは残念である。